

SAO裏企画に選ばれた少女達

「わたしの顔なんて、二度に見たくないわ……」

「おれは貴方達の言いたいなりに従ってやらねえ」

心と身体を操られ

「……」

植え付けられる 強制絶頂

「……」

「……」

無垢なカラダは快楽漬けにどの辺りまで

「……」

大切な仲間達が

「……」

音声付きササッドナル

肉棒中毒へと堕ちて行く…

Minority heartst7

CG基本33枚

ページ26本

～催眠寝取られ～

「君の名前は？」

「……シリカ……です」

「本名は？」

「……綾野……珪……子……です」

虚ろな瞳の少女が、男の言葉に従順な答えを返す。

「SAOはどうやって始めたんだい？」

「……ナーヴ……ギア……お父さん……に……」

「買って……もらいました」

「なるほど。それじゃあ、」

大好きなお父さんには申し訳ないけど、スカートをめくってみようか」

常識的な感覚を持つ女の子ならば、嫌悪を抱くような、ありえない命令。

しかし——

ズ

「はい……」

部屋に集まった男達が目を見張る中、少女はゆっくりと、

しかし躊躇いもなく、自らのスカートをまくり上げる。

微かな衣擦れの音を響かせ、

スカートに隠されていた白い布地が薄暗い照明の中に浮かび上がった。

ズズ…

♡♡

「何といけない子だ……これは罰を与えなくてははいけませんな」

ペンダントを握る男が、集まった客人達に形式ばかりの同意を求める。息を呑む気配が周囲の男達の間広がった。

「罰として装備を解除しなさい。良いねっ」

「はい……はい……」

少女は頷き、胸のプレートに手をかけた。そのまま装甲の留め金を外し、紅の衣装さえもゆるゆると脱いで行く。

「これも一つのサービスなのだろう。」

SAOに限らずゲーム全般としてボタン一つで着脱が可能と聞いているが、今この場においては、より現実的なストリップが可能であるらしい。

脱ぎ捨てられた外套が柔らかい衣擦れの音を室内に響かせる。

そして男達の前に、下着だけを残した少女のしなやかな身体が現れた。

「そういういえばシリカちゃんは経験値が欲しいんだっただねっ」
未だ虚ろに佇む少女に、騎士服の中年男が尋ねる。
もちろん返答を期待してのことではないだろう。

「……経……験……値……」

「そう、経験値だ。

早く強くなつて、キリト君の隣に立ちたいだろうっ」

「……はい」

「シリカちゃんのためにお友達がたくさん来てくれたから、
彼らから好きなように、経験値、をもらつて良ら」

「……はい」

まどろみながら頷くその耳に、男がいくつかの言葉を囁く。

「それじゃあ……好きな人のためにいっぱいレベリングしてみようか……」
再び掲げられたペンダントから眩い光が発せられ――

「ん……ちゅ……はあ……あ……ん……っ……くちゅ……」

「……は……ん……ちゅ……あは……ふ……んちゅ……」

「んぶ……ん……は……あ……」

「精液……んちゅ……はあ……精液……ください……」

「ぽろっ」

「ぽろ」

「ぽろっ」

「ニギッ」

「……ふふ……そんなに私の精液が飲みたいかね？」

「……はい……んぶ……ちゅ……」

「欲しい……です……はあ……精液……ください……」

「全くもつ、これじゃどの程度の戦力か」

「わからないじゃないですか。」

「最初からフル勃起させておいてくださいっ」

苛立ち紛れに竿を握り締めると、

団員の口から苦しみとも恍惚ともいえないうめき声が漏れた。

「急いでるのに……っ」

「これじゃ今日中に終わらないじゃないですか」

「ひ……っ」

キッ

ブルン

「逃げないでくださいっ」

「これではいつまで経っても確認が終わりません」

「ア、アスナ様、それは……」

「んあ……ちゅ……っ、はあ……見ればわかる……れしよ……んう……」

「おちんぽ、が……あ……最後まりえちやんと……」

「んう……硬くにやる……よっにい……んちゅ……あむ……」

「うお……っ」

「んぶ……うごかりやいで……えろ……くらみゅい……はあ……」

「ほりゃ……早く……んちゅ……おちんぽしよーロシキキリュ……」

「えろお……出してみれ、くらみゅい……」

ハ……っ

「……ア、アスナ様……それ以上は……っ」

へっ
へっ
へっ

ブルン
っ

「ひよんなんで……フリーアポスト……じゆるう……」

「たひゃかえまひゅかっ……っあむっ」

キッ
キッ

っ
っ
っ

「んう……じゆる……はあ……んう……んぐ……

はあ……ろろ……んく……つけほ……

やれば……出来るじゃないですか……」

「ア、アスガ様……」

ド

ソードスキル発動後で神経がまだ敏感になっているのだから。うろたえる団員の腰に手を回し、無理やり引き寄せる。

ブルズ

ハ

ブルン

キ

ハハ

ビ

ビ

「んむ……らって……いゆる……まら、んあ……はあ……

おちんぽそーりよ……れろ……おっキ……

「ほら、次の人、早くズボン脱いでおちんぽを出してください。次の次の人もあらかじめチンポ出して待ってなさい」

いつの間にか列を作っていた部下に、副団長としての威厳をもって命じる。

「え……と、本当にその……これ、突っ込んでいいんですか？」

「良いに決まってるじゃないですか。早くして早くしてください」

キーン

ブル

ズ

ブルン

キーン

ハハ

ビーン

ビーン

「んふ……えろ……はあ……ちゅっ……あは……えろお……」

「最強ギルドの幹部さんが、

護衛も付けずにこんな時間に一人で歩いて大丈夫なのか？」

「はは、あれはアスナ君が特別なだけなんだよ。

私のような冴えないおっさんは、

妬みを買えるほどの人気さえないから何も問題はないのよ」

モジ

向かいに座る黒衣の少年の問いに、

少女の隣に座る中年の男が笑いながら禿げ上がったおでこを叩いてみせた。

「私よりも君達」そんなもの宿で食事なんかして大丈夫なのかい？

攻略組のトッププレイヤーとポリウムゾーンのアイドルが

夜のレストランでデートだなんて、明日の新聞が賑やかになるね」

血盟騎士団攻略副担当の男に視線を振られ、

シリカはあわてて背筋を伸ばす。

ニッコ

「……って、なにそれとっわけでは……」

「……っ……あ……はあ……」

熱にうなされたような艶かしい吐息が、少女の桜色の唇から漏れた。

「ん……♡
あもっ♡
……あぁ……はあ……ん……」

もっ♡

小さな身体を蝕む、官能的な甘い毒。

少女の異変に気付かないのか、同じテーブルでは、

既知の仲であるプレイヤー二人の何気ない談笑を続けている。

「まさかシリカを血盟騎士団に勧誘しようってんじゃないだろうな」

グハッ

「え？……あ……私が、何か……？」

キーン
キーン

ジブ……

「シリカちゃんが血盟騎士団に入ってくれたら、

うちの男達も頑張ってくれるんじゃないかなって話をしてたんだよ」

モ

ニッコッ

「えあお……わたしは……別に、血盟騎士団に

入りたいというわけでは……その……ないです……」

グイグイ♡

グイグイ♡

「はぁ……はぁ……はぁ……あ……はぁ

「……あぁ……

「……ん……っ」

ジブ……♡

キュン♡
キュン♡

♡♡♡
♡♡♡

「あせつやだ……こんなところ……

「はぁ……ん……あ……」

ローターに刺された乳首から生まれる情欲を逃がすかのように、
熱い吐息を吐き出す。

「はぁ……はぁ……あぁ……ん……」

♡♡♡
♡♡♡

「んあ……っはあ……んう……あつ……
ああん……や……あ……
ぐわん

キゅん
キゅん

耐えることの出来ない不規則な刺激がガチガチに尖った乳首と少女の肉真珠を強烈に叩き、撻り、少女の快樂中枢を揺さぶる度に淫らな声が漏れる。

「はあ……っあ、はあ……ああ……んっ、ああ……
飛 あ……っはあ……ん……ああ……
あ……ふ……んあ……っ……あはあ……

トロォム
グガガグ

もじもじと膝をすりあわせ、ぐりぐりと恥部を弄り回し、より強い快樂を求める。

「ふあ……ああ……はあ……あ……ああ……ふ……んふ……ああ……
ふん
ふん

「シリカくんは現実世界でも自慰を嗜んでいたのかね？」
も

「そんなーと……あ……クラスの子から……はあ……「こ……
触ると……気持ちいいって教えてもらっ……て……あん……
少しだけ……ですよお……」

「ほっほ、そんなに股を揺らして……」

「シリカくんは我々を誘っているのかね？」

「だって……あん……おまんこ、見えた方が……
あ……」

「おいさんたちも……オナニー、しやすいですよね？
あ……」

「パーティレイは……助け合いが、基本……なんですよお……」



「えへへ…経験値…こんなに…いっぱい…」

「はあ…すげえ…嬉しいです…」

「でもまだ…イけますよね…もっともっと…」

「はあ…経験値…んふ…もらっちゃいますよお…」

「もちろん、引き受けたからには最後まで付き合おうではないか」

「シリカくんは心行くまで『レベリング』に励みたまえ」

「あん…ありがとっ…」

「ハイハイ…えへへ…」

「えへへへ…オナニー…はあ…オナニー大好きです…」

「…あ…見え…ますか？」

「…はあ…シリカの…エロまんこ…ちゃんと見ええますか？」

「…はあ…オナニー…オナニー…」

「…はあ…精液…」

「一生懸命、オナニーしますからあ…おじさん達も、あんの…」

「…はあ…」

「…はあ…」

「…はあ…」

「…はあ…」

「…はあ…」

「…はあ…」

3: Lisbeth 6,650,000

「どうもリーズベットです。キコキのパイズリフェラから素股までなんでもオッケーです。」

おチンポのメンテナンスなら是非、品質と実績のリーズベット武具店をよろしくお願いしますっ

Asuna 9,850,000

「こんばんわ、アスナです。現実世界では受験勉強ばかりですっ辛い退屈してました。」

愛のあるセックスに憧れてますので、私の処女を奪って大人にしてくれる人、落れをお願いしますっ

「オークションに参加してくれてありがとうございます、シリカです。」

私のお父さんみたいに、いっぱい甘えさせてくれるおじさん、お待ちしてます」

「サ、サチです…助けていただいてありがとうございますっ」

Sachi 250,000 Col

「今までではランスとか盾とかやってたので肉便器としては不慣れなところもありますけど……」

その……精液いっぱいぶっかけて、生きていることを実感させていただけると嬉しいです」





ハァ♡♡♡

「あっ……あっ……あっ……はあ……はあ……はへ……あ……あ……あう……ん……あっ……

あっあっ……あんっ……クワッ

ハァ♡♡♡

「あん……はあ……あ……っ……ふ……んふ……

あん……はあ、すん……おじ様のちんぽが……

中で……あ……ゴリゴリゴリしてるのが……わかりますっ……

「これが……っあん……これが……セックスなんですっ……っ……あんの……

ズンズン

あん……いかがですか……はあ……わたしの、処女まん……

ジュッ
ジュッ
ジュッ

ズンズン
ズンズン

「こちらのしゃりませつ。」

温かいお飲み物はいかがでしょうか♪

ハキハキとした明るい声。

最高の笑顔をもって、シリカはお客様を出迎えた。

見せ付けるようにして大股を開き、
ウェイトレスらしいその商品価値をアピールする。

「当店自慢の、絞りたて生ロリラブリュースです。
頑張って作りますので是非是非ご賞味ください♪」

「ああ、やっぱりシリカなんだ。メールを見たときは少し驚いたけど、
ほ、本当にウェイトレスをやっていたんだね…デユラフ…」

「えへへ、ありがとうございますお客様♪」

えと、こちらの…おまんこのバイブにスイッチがありますので、
そちらをONにしてください♪



次回

「イっくううううううう……」

丸いおとがいを反らし、四肢を痙攣させ、ウェイトレスの少女が快感の頂を仰ぐ。

控えめな雨音と共にシリカの恥部から透明な液体が噴出し、同時に男の赤黒い鈴口から白濁液がぶっかけられた。

「はあ……はあ……はあ……あ……」

「……っ……はあ……」

悦楽の余韻を熱い呼吸に乗せて吐き出す。

「はあ……はあ……あーん……あ……あれ……」

ポッパ

グアイグ

ジ

トロ

程よい疲れに浸るシリカの前で、客の男は未だ空のグラスを見つめていた。どこやら恥部から噴出したシューズは、グラスに入ることなくお客様の顔を濡らす結果をもたらしてしまいました。



「ポールダンスは初めてなんだけど……えへへ♪」

挑発的なBGMに乗せて腰を振り、ポールに絡ませる均整の取れた四肢。

「後ろの人ー。ちゃんと見えってるかな？」

もっと前の方に来て好きなように見て良いよー」

ポールに恥部を擦り付けようとして股を開き、腰を突き出し、

スカートのその奥を晒す。

ブル

女の色香を撒き散らしながら、

ステンレス素材を模した銀色の棒を掴んでのセックスアピール。

「これじゃスカートの中丸見えだよー」

もぉ……みんなエッチなんだから……」

微笑みながらゆっくりと舞台上を回り、

脱げかけた装備からチラつく肢体を男の一人一人に見せ付ける。

「はい。それでは、**血盟騎士団副団長、閃光のアスナ。**

ストリップをしまーすよ♪」

「えへへ、どうかな。リアルでは学校指定の水着くらいしか
着たことなかったんだけど…」

ちやんとオナニーのおかづになってたら嬉しいなよ」

可愛らしい顔立ちに柔らかなライン、成熟過程の少女特有のあどけなさ。

そして、それらを押しつけるようにして存在感を示す際どい水着と、

どぎつい女の色香。

ブル

肉付きの良い大腿部から緩やかなラインを描く腓腹筋、歪みつつ無い爪先。

その二つをポールに絡ませ、セックスアピールを見せ付ける。

「ちょっと大技に挑戦してみよっかな。

水着がズレちゃうかもしれないけど、

うっかりおまんこ見えちゃうたからってGM「うーっちや

ダメだからねー」

「や……っあんっ……」

あ……っんう……あぁ、これ……ポールとあそびが擦れて……

ちよつと気持ちいいかも……」

薄暗がりを取り取り取る照明の中で、汗ばんだ肌が扇情的に揺れる。いつの間にか汗以外の液体が少女の下半身、主に股の辺りを濡らし始め、水分を含んで半透明になった白い水着が肌に張り付いていた。

キョムム
キョムム

「んう……男の人に……見られながら……はぁ……」

おまた……「すり付けてると……変態女って感じがして……」

恥ずかしくて……はぁ……アソコが……濡れてキンちゃっつ……」

言葉を紡ぐ間にもアソコの腰は淫らに揺らめき、弓状に反らした胸の上で張りのある乳房がたゆんと弾む。

「もっと……もっと見て欲しいの……」

私の……淫乱アスナのはしたない姿で……

あ……おちんちん……勃起させて欲しいの……」

「えへへへ、おっぱいもおまんこもおぜいんぶ、見えちゃうよお……」

ポリゴンデータにしても美しく淫靡なその肢体に、

客席の男達のそれがさらに硬度を増して行く。

「うん、良いよ……おちんちん擦って良いよ……」

はあ……私もおまんこくちゆくちゆくするから……あん……一緒に、

オナニーしようっ……」

少女の割れ目から零れた液体が、舞台の染みをさらに広げて行く。

「えへへ……あんっ……ああ……ホタ能心、ホタ能心なの……」

アスナはあ……おちんぽの中で……はあ……

おまんこ露出して興奮しちゃっ、ホタ能心女なんですっ……」



「あはあつ、キントあつ、おちんぽ汁キントあつ。」

うれひいいれしゅう……ああん、セーエキどろどろだよお……

あ……はあ……えへへ……えへへへ……」

栗色の髪の毛から柔らかかな乳房、白桃の女尻まで濃厚な雄の精に包まれ、蕩けた痴女の顔でアスナが微笑む。

ドブリン

キョム
キョム

「えへへ、だつてえ……こんなじ……」

ああ……エロエロのおちんぽ汁かけられたらあ……

誰だつて……はあ、エッチなこと……頭が一杯になつちやつよお……

あ、やあ……また……ああ……」

びちやびちやと音をたてて、少女の身体はど「までも汚れて行く。

「あんっあんっ……はあんっ……ああ……」

精液オナニーしゃべりおこ

おまんこくりくりするの止まらなよお……」

「それじゃあ、ローションかけて行きます。」

「ちよつと冷たいかもおれないけど、我慢しててね」

「んふっ……」

「……」

「あんっ……動いちゃだめ。あなたは、ただ寝ておれば良いの」

「す、すみません」

「ふふ、女の子のからだ……気持ちいいでしょ……」

ニ

さわ……♡♡

「いつもお風呂に長くしてくれてるから……」

「私からの……お礼、です……はあ……カラダ中ぜんぶ……」

「洗ってあげるからね……」

「どこか…痒い所、気になる所は、ありませんか？」

「ちよ…うわ…副団長…」

ズリズリ

ダブ

「んふ、良いよね…そのままですよ〜」

「んっ…ふふ…今、ムクついてしまいましたね〜」

ハ〜♡

さわ…♡

「ゴゴが、気持ちいいんだ？」

「ココを触られると…あは、」

「またビクッって…カワイイわ」

クワ♡

クワ♡



「ちゅ……んぶ……は……あん、動いちゃー

らめですよお」
「ん……ちゅ……」

「あは……顔が真っ赤ですよお……」

そんなじ……じゅるる……気持ちいいんだの」

「はあ……女の子に、おちんちん舐められて気持ちいいです、

「ロまん」でえろえろさせて……勃起ちゃんぽ、

「くぐぐぐ」させてますう……って……言っても良いのよ……ん」

ん
じゅるる

さわ

「我慢……しなくて良いよ……はあ……えろ……じゅるる……」

えろれろお……あ……ん……もっと、素直に……」

えろ……えろ……えろ……じゅるる……」

ぐり

「えろ……れろお……はあ、また……」

「おっきくなつてきましたね……じゅるう……」

「……私の口で……もっと、して欲しいんです」

「……んふ、嘘付いてもだーめ」

「おちんちんは……んなに……はあ……正直なんだからあ……」

ハ
ハ

じゅるる

ドロォ

「……えろ……じゅるる……れろお……」

「……はあ……ん……」

「……もっ……回……」

カ
カ

さわ……

食を満たす悦びの声を上げながら、

飼い主から与えられた飼料を臍壁で咀嚼する。

「んもお……ふんもお……ふもお」

「おう、まだ足りんけ。」

ええぞおアスナ。ガッツリ食ってええ乳出すんやでえ」

「もっ……んお……ふも……んもお……おうっ」

……んもお……」

「よしよし、いい」だ。美味い乳をたのむぜ」

キモトさんが頭をなでてやると、牛は眼を細めて嬉しそうに腰を振った。

「もおっ……もおん……ふもお……んもおっ」

半開きの口。緩んだ目尻。

これほど表情豊かな動物オブジェクトも珍しい。

「何か本当に生きてるっぽいな、お前は」

涎が垂れる口元を指でなぞってやると、

牝牛は舌を出してキモトさんの指をしゃぶり始めた。

ズンズン

「んもお……あっ……んちゅ……えろ……はあ……あ……」

「んもお……んちゅ……んちゅ……んちゅ……っ」

ちゅちゅ

ドブ

「これは……ちよっと、やばいかも……」
キ

全身を触手に絡め取られ、シリカの身体は宙に浮いた状態だった。
視界を埋めるピンク色の肉鳶を前に、シリカは呻く。

キ

「ふ……んう……や……あふ……っ……あ……や……」
ッ

くすぐったい上に気持ち悪い。

ッ

触手の表面にびっしりとささくれ立つ弾力のある肉棘はそれぞれが個々に蠢き、シリカの反応を確かめるように、全身をくまなく撫で回していた。

ニョルッ

ニョルッ……

「……んっ……っ……あ……」
キッ

そのショーツの中に肉鳶が滑り込み、シリカの口から甘い吐息が漏れた。
年の割りに肉付きの良い臀部を、触手が這い回る。

ニョルッ

ニョルッ……

ズッ♡♡♡

ズッ♡♡♡

キッ♡

♡♡♡♡♡

♡♡♡

「ハハ……っ……うく……はあ……」

「く……っ……あは……んく……っ……あだめ……」

んっ……違っつ……違っつのお……あん……

ああ……あ、そっ……だめえ……」

「おほおほおほおほおつ」

ガラ

脳髓を掻き穿る強烈な快感。

圧倒的な愉悦、その快樂電流に視界が白く塗りつぶされる。

少女の口と股から駄々漏れる女の涎が、その歡喜の声を代弁していた。

「おほおつ……おう……あ……かはつ……あはあつ」



「恥じらいが足りないねえアスナ。」

僕としては、ストリップみたいにしてほしいって脱いで欲しかったんだがね」

「お互い暇ではなないのでしょー」

作業は手っ取り早い方が良んじゃないですか？」

キゅっ

ブルンッ

ブルンッ

「なるほど………せめいもの反発とスランリッが。」

「ふふ……その顔がだらしないなく緩んでいく様を思いつく、本当にたまらないうよ」

「あぁっ……っ……ん……あ……ふぶぶ……っ……」

「いいねーその顔ーその表情ー」

「愛する男のために自らの身体を差し出し、

涙を浮かべて屈辱に耐える高貴なる女騎士ー」

「オンラインゲームのクエストとしては、

最高のシナリオだと思っただが……

そ「ん」と「ろ」ど「う」なのかなあ、血盟騎士団副团长殿？」

プ

ちゅぽ

ちゅぽ

ちゅぽ

ちゅぽ

ちゅぽ

ちゅぽ

ちゅぽ

ちゅぽ

ちゅぽ

ちゅぽ

フッ

ピョッ

ブルン

キ

「……っ……っ……最低の……気分……決まってる」でっ……っ……」

キ

……っ

「おおっ、いきなり自分から腰を振るなんて……ふう……
お堅いフリして中々の好き者じゃないかアスナ」

「あう……あう……あ……は……つ……う……」

パンッ

ブルンッ

ズバ
ズバ

パタ
パタ

「ち、違っつのお……あん、これ……抜いてえ……」
「あん、あん、ああ……りやめえ、中あ……中はお……」
「やっ、あだあっ……あっあっ……お中あ……だめえ……」

「やだあ……あん、あ、やだあ……や……っ……」
「あっあっ……だめえ……だめえ……た、助けへえ……」

「あん、キート……くうんっ……たしゅけへえ……」

「あづつ…あえああう、ああうづつ…つおほあつ」

「良い声で啼いてくれるじゃないか。録音して全プレイヤー諸君に聞かせてやりたいくらいだよ」

「ああう…っ…ああ…ああうっ…」

「くひひひ。まるで獣みたいに鳴くじゃないか。」

「どうせなら牝犬に成り下がって、ワンでも吠えてみたらどうなんだい？」

「…ぐ…ふ…ふいゃけえあへえあはあああああつ」

「あん…あひ…あつ…あんっ…あんうああ」

ビクンッ

ビクンッ

ビクンッ

ビクンッ

パタ

パタ

ドロ

ズン

ズン

ブルンッ

アツ

ビクン

ハッ

ゴク

ゴク

ガク

ガク

「あづつ…あえああう、あおうづつ…つおほあつ」

「良い声で啼いてくれるじゃないか。録音して全プレイヤー諸君に聞かせてやりたいくらいだよ」

「ああう…っ…あう…あうっ…」

「くひひひ。まるで獣みたいに鳴くじゃないか。」

「どうせなら牝犬に成り下がって、ワンでも吠えてみたらどうなんだい？」

「…ぐ…ふ、ふいやけえあへえあはあああああつ」

「あん…あひ…あつ…あんっ…あんうああ」

ビクンッ

ビクンッ

ビクッ

ビクッ

パタ

パタ

ブルンッ

ズン
ズン

ドロ

ビクッ

アッ

ハッ

ハッ

ハッ

ハッ

ハッ

ハッ

ハッ

ハッ

ハッ

ハッ

ハッ

ハッ

ハッ

ハッ

ハッ

ハッ

ハッ

ハッ

ガク

ガク



「……まったく、男の味を覚えた途端にこんな姿を晒すとは。閃光様も所詮は人間だったということかね。今の君の姿を、キリト君にも見せてあげたいもんだよ」

「あんっ……あえ……あん、あひ……あん……ああっ……」

「あんっ……おんっ……あんっ……あぁっ……ああんっ……あぁんっ……あはあっ……」

パンッ

アッ

ビクッ

ブルンッ

ズバ
ズバ

ビュクッ
ビュクッ

ドロ

パタ

パタ

ビクン

ビクニッ

パンッ

ガク
ガク

「ぬ、濡れてなんか……あ……んっ」

「ふ……はあ……ぐ……う……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「我慢しなくて良いんだよアスナ。捕らえられたお姫様は、悪者にその身を汚されてこそ輝くというものだ」

「だ、誰があなたなんか……」

「あ……はあ……んっ……」



あんの... あんの... あんの...
おまんま... おまんま... おまんま...
あんの... あんの... あんの...
おまんま... おまんま... おまんま...

あんの... あんの... あんの...
おまんま... おまんま... おまんま...
あんの... あんの... あんの...
おまんま... おまんま... おまんま...

あんの... あんの... あんの...
おまんま... おまんま... おまんま...
あんの... あんの... あんの...
おまんま... おまんま... おまんま...

あんの... あんの... あんの...
おまんま... おまんま... おまんま...
あんの... あんの... あんの...
おまんま... おまんま... おまんま...

あんの... あんの... あんの...

あんの... あんの... あんの...

あんの... あんの... あんの...

あんの... あんの... あんの...

「ハイニーヤ……カメ」

卑猥な音をたてながら、インゴットがリスベットの膣内へと飲み込まれていく。

「……あは、おらに。みんなに大キンの始めてかも」

ブルン

ブルン

ゴリゴリ

ゴリゴリ

ジュッポ

ッポ

出来るだけ同じリズムで、丁寧インゴットと自身の腰をぶっつけ合う。

これだけ太くて逞しいインゴット……きつと素敵な武器になるに違いない。

「……んぶっ……」

「……んぶっ……」

何かがおかしいと思いはじめたのは、三百回ほど叩いた辺りからだった。

「……さんびやくはち……さんびやくきんづ……はあ……」

「さんびやくじゅう……さんびやくじゅうちち……っ……はあ……」

ブル

さすがに少し、かかりすぎではないだろうか。

ジュッポ

「……ん……おか……しいなあ……」

インゴットは汗に濡れ、灯りを反射するほどに輝いてはいるが、それでもインゴットのままであり武器と呼ぶには至っていない。

「……はあ……さんびやくはち……」

「さんびやくきんづ……さんびやく……ろくきんづ……」

「な、なんで……あ……なんで武器に、ならなのよ……」

「あは、すてお嬢……こんな感じの……は……」

やはり素材に対して、語りかけることが重要だったのだ。

「んふん……」

リズベットは音を立てて腰を打ち下ろした。

弾けた汁が金床を濡らす。

ブルルン

ハッ

ブルン

キュウウッ

ゴリッ

ゴリッ

ジュッポ

ゴッ

ゴッ

ポッ

ハッ

「うん……うん……えへへ、そうだよね……気持ちいいよね。」

「インゴットおちんぽ……あん、こんな感じ……ビンビンだもんね……あ……んふん……」

「リズベットさんの、ああ……ドスケベおまんこ……」

「気持ちいいですって……もっと言ってえ……」

「それでは……第75層、ファイルドボスの攻略会議を始めます」

出来る限り落ち着いた声で紡ぐ第二声。キ

モ
モ

逃げたくなる気持ちを抑え… アスナは平然の限りを尽くして見詰め返した。

「本今朝、偵察隊のメンバーが

ファイルドボスの所在ポイントをお突き止めてくれました」

「……突進とプレスを組み合わせた典型的な動物型のようなようです」

「ちよ、ちよっとお……っ」

尻を揉みしだく隣の男に、アスナは小さく抗議の声を上げた。

ムツムツ
モジモジ

「いやあさすがは副団長様だ。その凛々しさ、

とてもローター仕込んでるとは思えない」

ビクッ

「はあ……あ……」

「……あ……はあん……あう……」
部屋中の視線から逃げるように無言で須郷を睨み付け、胎内から湧き上がる快感に耐える。

「あまり黙りこくっていると、みんなに怪しまれちゃうよ」

「そんなことはあ……わ……わかっています……」
軽く息を整え、恥ずかしさから卓上に落ちていた視界をアスナは無理やり前方へと放り投げた。

「それから……こんかいの……ていさつではあ……コホン、ごめんなさい……はあ……はあ……えと……その、復察では、一段目のHPバーをろ割削る程度で引き返しましたが……」

「クン……あ……はあ……あ……あはあ……」
「ビクッ……トロ……」



「……あ……はあん……あう……」
部屋中の視線から逃げるように無言で須郷を睨み付け、胎内から湧き上がる快感に耐える。

「あまり黙りこくっていると、みんなに怪しまれちゃうよ」

グイイイ

「そんなことはあ……わ……わかっています……」

軽く息を整え、恥ずかしさから卓上に落ちていた視界を

アスナは無理やり前方へと放り投げた。

「それから……こんかいの……ていさつではあ……コホン、」

「めんなさい……はあ……はあ……えと……その、復察では、」

「段目のHPバーをろ割削る程度で引き返しましたが……」

のびのび

ビクッ

ム

トロ

のびのび

のびのび

のびのび

「クンッ……あ……はあ……あ……あはあ……」

のびのび

のびのび

モジ
モジ

グググ

ム

のびのび

のびのび

「すみません。ちょっと……えへへ……」

情報……が、整理しきれなくなって、その……モジ……

もしもじと膝を擦り合わせながら、アスナは机に向かって弁解していた。

グイイイ

ピク

はあ……はあ……はあ……あ……っはあ……

わさわさ
ググググググ

トロ……

熱湯と冷水をかけられてひしゃげた頭で、必死に言葉を探す。

ビク

ハッ

のびのび

あ

ググググ

ビク

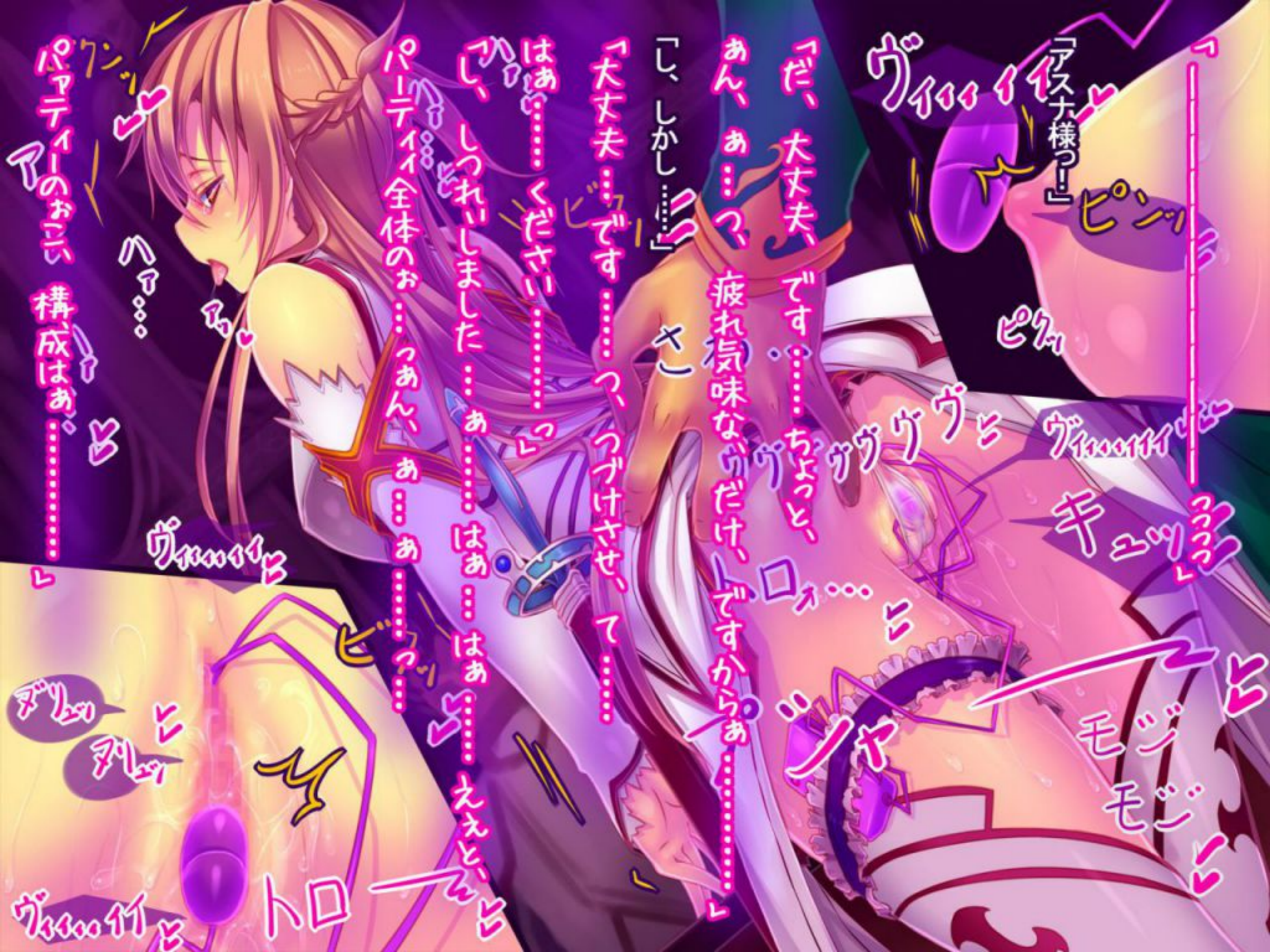
ム

トロ

「……えと、何らかのタイピングで、メス型が出現すると思われませんが……」

……あ……

ググググ



パーティのおこい
構成はあ

あ

アハハ

アハハ

アハハ

トロ

パーティイ全体のお
っあん、あ

はあ
……くださー

しつれいしました
……あ
……はあ
……はあ
……ええと

大丈夫……です
……つづげさせ

「……しかし……」

だ、大丈夫、
です……ちよっと、
あん、あ……
疲れ気味なだけ、
ですからあ

「……」

グ

グ

グ

グ

グ

「アスナ様っ」

ピン

ピク

グ

グ

キ

ク

ク

モ

モ



「無理をしちやいけないな」

アスナの身体は須郷に抱き寄せられていた。
ローブで包み込むように抱で、少女の蕩けた顔を隠す。

「キリト君のステータスはちゃんと上げておくから、安心してくれたまえ」

「……続けなきゃ……はあ……会議……あん……」

「……かーぎを……つー……続けないとお……モ……モ……」

「……あ……で……でもお……」

「……え……あ……ハ……ハ……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「は……あ……はあ……あ……」

「乳首もガチガチに立っていますな」

騎士服の男が、アスナの胸で自己主張を続ける
桜色の突起を指先で叩いた。

くいっ

キューン

ぐわんぐわん

ん

んふ……あ……

「……ローターを……仕込まれて……」

攻略……中なのに……感じてました……」

「んん、聞」えないね。

副団長らしく、大きな声を張って「聞いて」

「が、会議中に……はあ……ローター……で……」

感じてましたあ……」

「情報は具体的に述べたまえつ」

「あいつ……あ……はあ……す、すみませ……ああ……」

「んく……はあ……」 攻略会議中に……リモコンローターで……」

身体中を……あ……い、弄られ、て……」

おまんこ、グンヨグンヨに濡らしてましたあ……」

キューキュー

ぐんぐん

ぐんぐん

くっ

ん

「ほほお、ぬるぬるじゃないか…」

ロータープレイがずいぶんとお気に入り召していったようだね」

ビク

グワグワ

おほおほ

おほおほ

ビク

「んん、何度も達してしまっただらうっ…」
「んん、違あう…の…そんなじゃな…」
「はい…です…」

「んん、何度も達してしまっただらうっ…」

「あ…あ…」

キューキュー

おほおほ

おほおほ

おほおほ

おほおほ

おほおほ

「あ…」

「あ…」

トロ

「はあ……はあ……あ……はあ……はあ……」

ビクッ

クワクワッ

ビクッ

「そう残念そうな顔をしないでくれたまえ。」

「そろそろゴイツが欲しいだろう?」

「さあ、足をもっと開いて……くひひ、準備万端じゃないか」

キュン

ウウウ

トロ

ビクッ

ビクッ

「ん……」

「あはは、私もすっぴんキョキョしてる……」

「好きな人に抱かれるのって、こんな気持ちいいんだね……」

「動いてみて良いかな」

「うん……」

ブルン…

チュプ

ニッコッ

ブルンッ



「ちゅ……ん……はあ……愛してるって……言ってる……」

あ……愛してるって……ちゅ……はあ……お願い……」

「……愛してる……。アスナ……好きだ……」

アスナを……愛してる……」

「私も……好き……あ……」

キリト君が大好き……」

あ……ふ……んちゅ……」

「アスナ……俺……」

「良いよ、キリト君……そのまま……あ、中に……」

中に出して……」

「アスナ……」

ハァ……

ブルンッ

ハイ……

「キリト君……キリト君……もっと愛して……」

私を……離さないで……」

チュ

ビュッ

「ふうん、良いよ……」

キリト君にこんなにも喜んでてもらえて……
おたく喜びの……」

「でも、アスナは……」

ブルン…

チュプ…

チュビ

チュビ

ニコッ

ブルンッ

ハイ……

「私も……気持ち良かったよ。ありがとうキリト君……」

「ねえキリト君……愛してるって、もう一回言って……」

「一度落ち着いちゃうと、結構恥ずかしいんだけど……」

「お願い……」

アスナがその言葉の通り、愛を強請るように顔を近づけて来る。

「お、おう……えと、あ、愛してる……」

「もう一回……」

「愛してる……」

「っ回っ回」

「愛っ愛」

「っ声っ声」

「っっっ」

「ん……ふふ……キリト君の寝顔を、」

眺めていたいなーって思っ……えへへ……」

「えー……」

「これは今後のための訓練です。頑張って寝てください」

「……」

「……」

「君だけは……絶対に守ってみせる……」

「……うん、ありがとっ」

そう、この笑顔を守ってみせる。

今度こそ、絶対に。

「おほおっ」

「やめ……やめ……やめ……ええ……っ……おっ……おっ……おっ……んほお……っ」

キリトが眠るその隣で、アスナは白目を剥いて涎を垂らしていた。

「……っ……おほおっ」

「キ、キリひよ……うん……た、助け……あ……」

「あお……おほ……」

「おっ
づ
おっ」

「おっ
おっ」

「おほ
おほ」

「おほ
おほ」

「僕はねえ……アスナ……すぐ……怒っているんだよ……」「ガク」

「あ……あ……あ……あ……あ……あ……」

「ガク
ガク」



「...ガキガキの、勃起ちんぽお...」
「...」
「...」

「...」
「...」
「...」

「...」
「...」
「...」

「...」
「...」
「...」

「...」
「...」
「...」

「...」
「...」
「...」

「...」
「...」
「...」

「...」
「...」
「...」

「...」
「...」
「...」

「...」
「...」
「...」

「...」
「...」
「...」

「...」
「...」
「...」

「...」
「...」
「...」

「...」
「...」
「...」

「...」
「...」
「...」

「...」
「...」
「...」

「...」
「...」
「...」

「...」
「...」
「...」

「...」
「...」
「...」

ドロオ...

ズンズン

ガクガク

ガクガク

ビュク

ビュク

ゴッ

ゴッ

プク

プク

ビキキ

ムン

んぽ

んぽ

んぽ

んぽ

んぽ

んぽ

んぽ

んぽ

んぽ

「みなさん、私に何か用ですか?」

「い、いやあ…何か、珍しい装備だなーって思っで……」

「そ、そうそう、そんなにー…その…カツコ良い装備?」

見たこと無いから、気になっちゃってさ」

しどろもどろに答えながらも、男達はシリカを中心に円を描いて囲んで行く。
ばつの悪さよりも、最高峰の装備を見たいという欲求が勝っているらしい。

アツい
キラキラ

「そんなに…私の装備が気になりますか?」

「いや、いやあ……ちよつとだけなら、

じっくり見ても良いですよお」

ピンク色の薄い生地を勃起した乳首が押し上げ、
胸にひっばられた分股間にくいこんで行く。

「うおおおおおー……っ」

「みろよあれ……土手が丸見えじゃないか……」

「ス、スクシヨ撮っても良いっすか?」

「はい、良いですよ」

「うおお、ありがとうございます!」

荒い鼻息と共に数人の男が記録結晶をオブジェクト化させる。

「最高だよシリカちゃん……もっと、もっとお尻見せて……っ」

「あん……もう……ふふ……」

「みんな撮りすぎですよ……あ」

「あ……っ」

「お、おい…何か濡れてないか？」

「ちよ、シャッターチャンスっ」

男達がざわめき、「斉に恥部へと向けたフラッシュがたかれ、シリカの脳を白く染めた。

「んふ…みんなすっぴんに死にシャッター切ってる………」

「(足)…もっと、開いちゃおうかなあ………」

「……」

「シ、シリカちゃん、その…股がめっちゃ見えてるけど…いいの、これっ」
「えへへ…別に、淫乱シリカの露出まんこが
見えちゃったからって…何も問題ないじゃないですか……」
「みなさんの目で…じっくり…見ちゃってくださいっ………」



「え、今なんてっ…」

「ろ、露出まん…ええっ…」

目と口を開けて驚く男達のその反応さえも心地良い。

「んふ…露出まんニですよ…ほら…」

たくさんの方の人に見られて…こんなに、濡れて…



「びしょびしょになっちゃってるよ♪リカちゃん」

「もしかして、見られて興奮してるのっ？ヒロイ気分になっちゃってるのっ？」

「あん、もう……そんなエッチなコト、

言わないでくださいさーよう………恥ずかしくて、嬉しくて……

……女の子には……あ……よくあることなんです………」

「んふ……みなさんがいろいろ見るからあ……

リカのヒロ乳首、ビンビンになっちゃったんですよう………」

キラキラ

ヤ

「えへへへ、もっと……もっと見て……もっと撮影して……」

リカの勃起乳首も……ぐしょ濡れおまんこもお……

皆さんの目で……あ……犯してください………」

「んん、どうだいシリカちゃん。」

外でみんなの前でオナニーするのは…開放的で素晴らしいだろう」

「…あ…はい…あん、ああ…気持ち、イイ、ですう…」

「露出オナニー…あふ…一人でするよりも…ずっと…ああ…」

「み、見えますかあ…おちんちん大好きなどすけべエロまんこと…」

「ビンビンの勃起クリトリスう…」

ハアアア
アアア
アアア

クリクリ
クリクリ
クリクリ

クリクリ
クリクリ

ジュポッ
ジュポッ

「胸だって…今はまだ小さいけど…」

「あん…乳首は…そんなに…ああ…敏感、なんですよお…」

「シリカちゃんて意外と変態だったんだね。そんなトコも可愛いよ…ぐふふ」

「えへへ…変態…変態ですう…シリカはあ…」

「あ…街中で…みんなの前で…オナニーしちゃっ…」

「はあ…どすけべ変態女なんですう…あはあ…あ…」

「あんっ……あんっ……あんっ……あはあ……っ……あん……」
「ああん……ああん……んう……」

「外でいくの気に入ったみたいだねシリカちゃん。中がまだ動いているよ」

「あん……だって、露出アクメ……っ……はあ、すげえ……」

「おちんぽまだ……離したく、ないんです……」

「ハアッ……」

「ぐわっ……ぐわっ……ぐわっ……」

「ピクッ……」

「ああ、すげえ……おじさんたちの勃起ちんぽ……」

「びんびんに反り返って……私も……おまんこ疼いてきゅちゅっ……」

「あんっ……もっ……もっ……もっ……」

「変態シリカのロリまんこもっ……」

「中年ちんぽくわえっ……どすけべおまんこ……っ……ああ……」

「がわがわ……」

「ジュポッ……」

「ジュポッ……」



「あん……こんな……嬉しい……です……」

「えへへ……おちんぼ経験値……」

「シリカちゃんが頑張ったおかげで、たくさん経験値もらえたね」

「あう……んう……あっ……あっ……っ……あ……あ……は……あ……」

「……」

ドブッ

ビク
ビク

ビク

フッ

ジュポッ

ジュポッ

ビク
ビク

ガク
ガク

ハ
ア
ク
ク

ク
ク

ク
ク

ク
ク

ク
ク

ハ
ハ
ハ
ハ

ハ
ハ

ハ
ハ

ハ
ハ

「ん……えへへ……おちんぽ経験値……あん……」

「こんな……嬉しい……嬉しい……です……」

「いやあ、良かったよシリカちゃん」

「経験値とかは良く分からないけど、満足してくれたなら俺らも嬉しいよね」

「あん……もっとですよ……」

「えっ？」

「まだまだ……精液足りないんです……もっともっと……」

「レベル上げしないと……はあ……また、置いていかれちゃうんです……」

「えっ？レベル？」

「アッ」

「グハッ」

「グハッ」

「グハッ」

「だから、今日はあ……おちんぽ玉が、」

「空っぽになるまで……ゲームン出して……くださいねえ……」

「……うお……」

「萎えていたはずの下半身が、シリカの微笑みとともに再び逞しさを取り戻す。

「ふふ……夜までずっと、精液ドキュドキュして……」

「シリカのレベルアップに……はあ……付合って、もらいますよ……」

「ピクッ」

「カッ」

「フッ」

「ジュポッ」

「ジュポッ」

「……変わった形の便器だな」

「12年ほど」「トイレ」「触れていならせらびる覚悟ではあるが、

とびう

便器

中出し

ONLY

キュン

Sex

中

毒

ませ

便器というものは、もう少しシンプルな作りではなかっただろうか。

概ねの形はあっているのだが、細部にとこが引つかかりを覚える。

自由

便器

肉壺

中出し

OK

Fuck me!!

花

穴

あり

毛

「うーん、こんなだったかなー……」

まるで便器の穴から女の子の尻が突き出ているような、そんな違和感。

「……………変わった形の便器だな」

「12年ほど」「イスレ」「触れていながらせらぶって覚えずではあるが、

便器というものは、もう少しジンプルな作りではなかっただろうか。

概ねの形はあっているのだが、細部にどこか引っかかりを覚える。



「うーん、こんなだったかな……………」

まるで便器の穴から女の子の尻が突き出ているような、そんな違和感。



「いんにちちち、当肉便器をミニ利用いただき

ありがとうございます。

初めての方は、

を…

それ以外の方は、2、を押してください

赤いフレアスカートをまくった

尻から明るいアナウンスが流れ、

タカシさんはとりあえず左の尻肉：1をタップした。

キュン

「まず、服を脱いでくださいの。

続いて取り出したおちんちんを

勃起させてください

「おちんちんが勃起しましたら、

キュン

ぐしょ濡れの肉便器まんこに必ずほりハマせて、

尿意を催すまで腰を振ってください

「……あ……んちゅ……ちゅ……はあ……あ……」

えろ……っ……はあ……るろお……」

「んちゅ……だって……須郷さんが……っ……」

んぶっっ……んむ……んうっ……」

「んん、新妻アスナ。」

今の場では名前ではなく『アナタ』と呼んでくれたまえ」

ググググ

グ

トロ

「んう……ぶは……けほ……はあ……はあ……」

ア、アナタが……おらんに……ちゅ……」

「こんな……はあ……いやらしい道具……ハメたから……」



「……あ……誰とも、セックス……出来なくてえ……」

えろお……じゆるう……はあ……辛かった……ですう……

えろお……じゆる……じゆるるる……えろ……るろ……あはあ……」

「くひひ、また浮気でもされたらたまらないからねえ。

すまなかったね、アスナ」

「そ……っと思いつなら……るろ……早く……」

ん……外して、くだせこ……」

ググググ

トロ

ググググ

ぽろぽろ

ぽろぽろ

ぽろぽろ

「そうだね、早く外して僕とのセックスを思う存分楽しみたいよね」

「ん……ちゅ……アナタと、したいわけじゃ……」

あふ……ん……じゆるう……」

「あんの……あつ……やだ……ん……ちゅ……」

「こんな……ところであつ……はむ……んぐ……」

「蹲踞の姿勢を取るアスナの股下で、
淫らな水溜りが広がって行く。」

「くひひ、キリト君の部屋でおもらしとは……もはや彼に顔向けできないねえ」

グググググ

トロ

ビキ

ビキ

「……あつ……あつ……あんの……ああ……あつ……んむ……じゅる……
はあ……あつ……あんの……ああ……あつ……んむ……じゅる……
はあ……あつ……あんの……ああ……あつ……んむ……じゅる……」



「場所を変えようか。僕の部屋で君の喜びそうな用意が整っている。
」のままついて来てくれるとありがたいが…
そこはアスナの意思にまかせよう」

「私は……ん……はあ……
同意も拒否も示せないまま、アスナの心が恋と淫欲の間で揺れ動く。
答えの出ない少女に、須郷は唇の端を吊り上げた。
「キリト君に強くなつて欲しいなら…
彼のためを思うのなら、僕についてきたまえ」

「くひひ、僕と一緒に来てくれるね。」

「……は……」



「あんっ……もうっ……んふ……アスナさんがもたもたしてるから、おじさん達がザーメン出しちゃったんじゃないですかあ……」

「せっかく中出ししてもらおうと思っただのに……勿体無いですよねっ」

「んふ……想像、してみてください……」
「アスナさんが素直になってくれれば……」
「おじさん達のおちんぽ汁、ぜんぜんぶ……」
「おまんこの中にどひゃどひゃして……してもらえるんですよ……」
「んふ……想像、してみてください……」
「柔らかいひだひだが……ちゅぶ……ちゅぶ……って掻き分けられて……」
「とろとろのおちんぽまんこ……ん……」
「おじさんの……極大おちんぽ……ちゅぶ……ハメられて……」

「んふ……想像、してみてください……」
「アスナさんが素直になってくれれば……」
「おじさん達のおちんぽ汁、ぜんぜんぶ……」
「おまんこの中にどひゃどひゃして……してもらえるんですよ……」
「んふ……想像、してみてください……」
「柔らかいひだひだが……ちゅぶ……ちゅぶ……って掻き分けられて……」
「とろとろのおちんぽまんこ……ん……」
「おじさんの……極大おちんぽ……ちゅぶ……ハメられて……」



「…おじ様の、おちんぽで…アスナのエロまんこ」

「犯して欲しいんです」

「バイブでイっても…おまんこ汁、止まらないんです」

「…生ちんぽじゃないと…駄目なんです」

ドビュウ

ビクンッ
ビクンッ

グググググ

ググググ

トロ

「どうか…おちんぽ無しじゃ生きられない…」

「肉棒中毒の淫乱アスナに…おじ様ちんぽ恵んでください」

「…ふ、大きくて逞しい、おじ様ちんぽで…」

「トロトロの肉壺まんこ、ずっぱりハマられて…」

「壊れるくらいに…ムユモムユモして欲しいんです」

「おじ様の…熱い、おちんぽ汁で…あ…ダメまんこ」

「…おっぱいにされて…はあ…中出しアクメ、したいのお」





「あ〜ん……あぁ……おちんぽ汁……」

「えろ……ろろお……いゆずるう……あは……」

「はぁ」

「はぁ」

「れろと
ザレマン経験値」

「んちゅう……はぁ……ありがとつ……ランゼンしますう……」

「ビュクッ」

「ドビュッ」

「……あ、だめえ……おちんぽ汁、抜いちゃ嫌ですう……」

「……もつと、もつと……アスナのどすけねおまんこ……」

「……」

「ドブウ……」

「はあ…あん、ソコ……もっとなあ……あぁ……そっとなあ……」

「ファミリーサービス…おちんぼの失くさばい…」

「あぁ、おちんぼ…勃起千んぽもっとなあ……あぁ……」

「は、…嬉しい…嬉しいです……ムンムンシロ乳首…」

「おじ様の指でくりくりされて、あんな…」

「勃起千んぽ……えろ……しゃぶって……」

「あゝ」

「あゝ」

「あゝ」

「あゝ」

「あゝ」

「あゝ」

「じゅる…」

「ぐわん」

「ぐわん」

「ぐわん」

「グワん」

「あはあ……いきまっすう……あんな…」

「中年ちゃんぽに囲まれて……どすけべおまんこイカされますう…」

「あゝ」

「あゝ」

「あんっ、だってえ……こんなに、何回も……中出しマクメ、

させられたらあ……女の子なら誰だって……

ろろお……おちんぽ中毒に、なっちゃいますよお……

「あはあっ……あん、ああっ……そこ……イッ……もっ……と突き上げて

……っあぁ……っ、ドスケベおまんこ……

「すすけべおまんこ……とじゅぽいゅぽしてえ……」

ギョ
グワ
グワ
グワ

ドブ
ドブ
ドブ

ゴッ
ゴッ
ゴッ

ドビュ
ドビュ
ドビュ
じゅるる……

アッ
アッ
アッ

ビュッ
ビュッ
ビュッ

ビクッ
ビクッ
ビクッ

「はあ……ああん……ああっ……
おちんぽ……おちんぽもっとおちんぽもっとお……」



REC

「ふふ…お久しぶりですおじ様の。」

「っして会えて、すらく嬉しーです」

「えへへ…今日はっっぱー、ブリーキングしちやーますよお」

1920

1080fps

18:37:20

映像の中で、二人の少女が微笑んでいた。

A

「久しぶりもなにも、っいの前したばかりじゃないか」

「まったく、君達はどっまでも貪欲だねえ…」

男の声。しかも若くない中年男の声。

「おじ様達も、おちんぽピンピンで辛いですよね。」

「遠慮せず、私のオナホまんこでスッキリして行ってくださいサー」

「ふふふ、また病院を抜け出してきてしまったのかい？」

「いけないコだねアスナ君。君はまだリハビリ中だろう」

「だってあっちの身体じゃ、まだセックスしてもらえないんだもん。」

「ふふ…おじ様ちんぽが恋しくて、抜け出してきちゃいました」

「シリカちゃんもダメじゃないか。病院で休んでいないと」

「でも、私は攻略組みですから。」

「レベルアップを怠るわけにはいきません。」

「もっともっとレベルを上げて、強くなりたいとかなんかですわ」

「んふ…ね。…はあ…わかる、でしょ…」

「二日もおちんちんもらえてなくて…おまんこでしょ濡れなの…」

「病院で経験値を集めようとする…」

看護婦さんに止められちゃったので…んふ…おじさん達が、

付キ合っってくださいね…」

「まだ君の体力は回復していないじゃないか。無理をさせるわけにはいかないよ」

「でも…この世界なら、身引んですよね…」

「おじ様達もお…わたしを犯したから…はあ…」

「…来てくれたんですよね…」

くはあ… トロオ…



ピンと張った四肢を小刻みに痙攣させながら、アスナが悦びの悲鳴を上げる。

「あんっ……っ……あぁイっ……おちんぽアグメ……気持ち……」

「あはあっ……あっ……ふ……あぁ……」

んふ……おちんぽ汁、っぽっ……」

涙と涎に塗れた顔を愉悅に歪ませる少女達は歓喜に満ち溢れていた。

「……っ……あんっ……あぁ……もっど……おちんぽ……」

「ずっぽりハメてください……中出しセックスで頭がっぽっ……」

「ダメまんー女を……おい様ちんぽで、吐ってくださいっ……」

ポドポド

ジュッポ

くはぁ

トロォ

ゴッポ

ジュッポ

ジュッポ

ゴッポ
ゴッポ

ジュッポ

ジュッポ

「はあ……あ……お兄ちゃんの、精液……ん……」

「はろろ……」

ドロォ……

「す、スゲ……っ?」

「えへへ……おいしいよ、お兄ちゃん」

コス♡

コス♡

コス♡♡

「あたしね……」

「嬉しかったの……」

「本当のコトを知って、」

「お兄ちゃんが帰ってきてくれて……もう我慢しなくて良いんだって……」

「……アスナさんのことは忘れなくてもいいの。」

「それでも……これからは……あたしが側にいて、」

「お兄ちゃんの心を……満たしてあげる……」

キ

「あ……あは……んんう……入ったよ……お兄ちゃん……」

ハッ
……

グリ
♡♡

「……あ……」

♡♡

チュプ…

「あん……ふふ……お兄ちゃんは動かなくて良いよ……」

ハッ
……

「あたしが、お兄ちゃんを……はあ……癒して、あげる……」

「ね……どうかな……あたしの中……」

♡♡

「はあ……ちやんと……あ、気持ちよくなって……くれてる……」

ハッ



「うん... うん... うん... うん... うん... うん... うん... うん... うん... うん...」

「あ... あ... あ... あ... あ... あ... あ... あ... あ... あ...」

「ん... ん... ん... ん... ん... ん... ん... ん... ん... ん...」

「ん... ん... ん... ん... ん... ん... ん... ん... ん... ん...」

「ん... ん... ん... ん... ん... ん... ん... ん... ん... ん...」

「ん... ん... ん... ん... ん... ん... ん... ん... ん... ん...」

「ん... ん... ん... ん... ん... ん... ん... ん... ん... ん...」

「ん... ん... ん... ん... ん... ん... ん... ん... ん... ん...」

「ん... ん... ん... ん... ん... ん... ん... ん... ん... ん...」

「ん... ん... ん... ん... ん... ん... ん... ん... ん... ん...」

「ん... ん... ん... ん... ん... ん... ん... ん... ん... ん...」

「ん... ん... ん... ん... ん... ん... ん... ん... ん... ん...」

「あ……」

「あ……」

「おや……本当に濡れているね……」

「こんなに透けてたらパンツをはいている意味がないじゃないか」

「ショーツに出来た溝を上から下へ、」

「下から上へと指で辿り中年男は唇を歪めた。」

「あん……もう……焦らななごでください……」

「おじさんちんぽ……早く……」

「キ……」

「キ……」

「トロ……」

胸と同時に成長した臀部を掲げ、左右に振り、リーファが男の欲望を煽る。「これはたまらんね……おじさんも、もう我慢できないよ……」

「でも、まだ満足してないんだよねっ。」

「ん……はあ……ふふ、おじさんはあたしの身体のこと……」

「何でも知ってるんだね……」

「そりゃあ2年の付き合いだからね……お尻を見れば分かるよ」

「そこは顔って言うてよね」

「ははは、すまないね」

「ぷっつと顔を膨らませ、すぐに猫なで声に戻る。」

「ね、おじさん……」

キューン

キューン

トロツツ

リーファが少しだけ腰を下げ、男女共通の穴を差し出す。

「ああ、分かっているとも……」

